

佐藤凉子先生講演会

「山王小学校における読み聞かせの現状と展望」

- ・初めは点であった活動が面としての幅を持ち、小学校内での読み聞かせが定着した現在、子ども達に対してどのような影響を与えているのかを再認識して欲しい。
- ・読み聞かせ等に関する法律「子どもの読書活動の推進に関する法律」（通称・子供読書推進法）に対しての大田区の見解などを確認。
→公的機関に対する、今後の提案の根拠にもなる。

「子ども達に読み聞かせをするということ」

- ・子供の頃好きだった本を大人になってから読んでみると感じ方が異なる。
お話を聞く時、子ども達は五感を使って聞いている。絵や、読んでくれた人の読み方、声の調子など、子供の頃の感覚を覚えているから、節をつけて読んだ部分や訛など、改めて聞くと違和感を感じる場合もある。→大人になってから読んだ時の感想が子供の頃と異なってくる。
- ・子供は絵本の世界と現実が地続き。例えば「しろくまちゃんのホットケーキ」を読んでもらった後、実際にホットケーキを作ったけれどしろくまちゃんのよりおいしいものは出来なかった。→味覚で感じる感性。実際の物よりも、本を読んでもらって自分で作り出したイメージの方がずっと豊かなものとして心に残っている。
- ・子供の頃読んだ本で印象に残っていると良く挙げられるもの…「しろくまちゃんのホットケーキ」「百万回生きたネコ」「11 ぴきのネコ」シリーズ、「ちいさいおうち」「ぐりとぐら」

↓

抽象的概念を知る機会になる

「色々な種類の本を読む」

- ・ワクワクする冒険ものや、楽しい話などだけでなく、身体の仕組みがわかる本や知識の本（人文科学系の）などを読むことによって、今まで体験したことのなかった喜びを味わう事が出来る。（『知』の楽しみ）→科学的な読み物としての本の楽しみ方も子ども達に知ってほしい。
- ・子どもは1日ずつ成長しているので、繰り返し同じ本を読んでも、毎日の生の体験をすり合わせているから、感じ方が異なってくる。
- ・科学本は絵などが細かく、読み聞かせには不向きなものも多いが、教室に一日置いておく、或いはブックトークで紹介するなど、やり方はいろいろある。
「たべもののたび」「しもばしら」「ミミズの不思議」→遠目がきく本

「語りと読み聞かせ」

- ・一冊の本（例題：「サラダでげんき」）を＜語り＞で聞くと、短い時間で内容を把握できる。＜読み聞かせ＞で聞く場合は聞き手も絵を見ながら（読み手も）読んでいくので時間が長くなる。

＜語り＞では聞く人のイメージで物語の世界に入ることが出来る。＜読み聞かせ＞では著者・画家両方の切り口から入ることにより、情報量が多くなる。目から入る絵と耳から入るお話と自分が持っているイメージの三つをすり合わせるという高度な認識活動を行っているということである。

小学 1,2 年生には、自分で世界を作りやすい＜語り＞は＜読み聞かせ＞よりすんなりお話に入っていくやすい。

「学校（小学校）で読み聞かせをすること」

- ・読み手が絵本を理解し、それを短時間で子どもに伝えていく学校での読み聞かせは、読書教育的な面を考え、その本の良さを読み手がしっかり「読み」、「理解」し、一期一会の精神を持った上で伝えていくべき。絵本の世界を理解し、壊さないよう的確に伝える。
- ・絵本の世界に入り、他方では原体験も重ねていくこと。本はすべての体験に関するものではない（本で体験できるわけではない）からこそ、現実の体験を豊富に持って欲しい。
- ・絵本を読むということは、高度な認識活動をしているということである。子ども達の生活の中にくお話＞を取り入れることにより、本から知識を得て欲しい。（そのためにも科学的要素のある本は大切である）
- ・面白い本に触れることで、体験しなくても知識を得ることが出来る。（民族や文化に触れる本・科学的な本・外国の様子が出てくる物語など）
- ・「本を好きになってほしい」という事は大前提だが、学校の中で読んでいるのであるから「社会的な責任がある」という事を忘れてはならない。

「読み手の姿勢」

- ・「どんな本を」「どのように読むか」という事には子供たちにお話を的確に伝えるという責任の他に、大きな社会的責任がある。そのためには選書（遠目が効くかどうか・絵の大きさはどうか・どのくらいの時間がかかるか・誰にでも受け入れられる内容かどうか）のポイントを考慮し、自ら練習し、他人の読み方を聞き、常に向上していく気持を持ち続けることが大切。
- ・初心者は本を「読むこと」に一所懸命だから、決して上手いとはいえなくても、その一所懸命さは聞き手の子供たちに伝わる。その事が伝わるという事も子供たちにとってはとても良いことである。読み聞かせに慣れてきた人は、そつなく読む事が出来ているかもしれないが、逆に初心者の「一所懸命さ」が忘れられている。そういう人のほうが危

ない。折り癖をつけておく、本を体から離す、ページをめくり急がない、情報を子どもが受け取ったかどうかを確認してめくる、などの基本的なことはもちろん、技術的なことも向上させながら、常に初心を忘れずに、「伝える」事に一所懸命になる事。

- ・本来は一冊一冊の本によって、読み方（感情を入れるかどうかなど）や声の調子などを変えるべきである。絵を指差したり、言葉の補足説明をしたりというのは、一冊一冊について要不要があるので、どんな場合もその本を十分に読み、消化し、聞き手の立場になりお話を的確に伝えるための努力が必要である。

「本のリスト」

- ・今までに子ども達がどんな本を読んできたのか（学年別リスト）その中でどのような感じ方をしてきたのか（記録ノート）、ただ読みっぱなしにするのではなく、記録をとり、きちんと調べ、自分自身で解釈し把握するという基本的な仕事を押さえながら読み聞かせをして欲しい。記録をとりそれを利用するという事は、同じ失敗を繰り返さず、少しでも前進できるという事である。

「中級者としてのあり方」

- ・ まず、基本的な絵本を知っておくこと、選書会、練習会などの読み手としての最低条件をこなし、これから読み聞かせを始める人への指導的立場にある自覚を持って欲しい。
- ・ ただし初心忘れるべからず、現場慣れせず、しっかり練習すること。「上手ねえ」とか褒め言葉だけで仲良しサークルを作ってはいけない。
「褒める事はしても批評できない」というのはボランティアグループにありがちである。お互いにアドバイスし合うという事、素直にそのアドバイスを受け取る、ということはとても大事であるが難しい。しかしそれをしないと、個人としてもグループとしても向上できない。
- ・ 基本的で伝統的な本から、古典だけでなく新刊本にも目をむけ新旧のバランスを考える必要がある。

「中・高学年に対する読み聞かせ—BOOKTALK」

- ・ 読み聞かせに向く本と向かない本を理解する。（たとえば絵が細かいけれど、内容として楽しめる本）向かない本であっても、その中に良い本はある。そういった本をブックトークで紹介するのが良い方法である。（1冊読む時間で3～4冊も紹介可能）
- ・ 読書の世界の幅が広がってくる中・高学年には、自分で読む楽しみを広げるきっかけになるように心がける。読み聞かせとしては一冊しかできなくとも、他に科学の本などの知識の伝授や、関連するテーマで本を紹介することにより、限られた時間内で多くの本の世界を広げることが出来る。

「中級者としての自覚と STEP」

- ・多くの本を短い時間で紹介するブックトークはかなり勉強しないと難しい。
季節にあった本の選択やテーマに沿った本の知識を多く持つためには、自分自身の本のリストが必要となる。
選ぶことと伝えることで自分の引き出しの容量を年月とともに豊かにしよう!! 引き出しの中身（絵本の種類）を増やしたり、減らしたり、整理したり、仲間内で勉強していく必要がある。

「小学校とのかかわり」

- ・小学校の年間行事に合わせて、タイムリーな本を選ぶことも必要である。（遠足の前には遠足の本、季節の行事の前には行事の本など）
- ・日頃から先生との関わりを持つことで学校とのパイプを太くし、学校図書の充実にも貢献して欲しい。
- ・読み聞かせで選んだ本が学校図書にあるか、或は読み聞かせに向かないが良い本があるか学校側と協議できるとよい。

「ボランティア活動の心得」

- ・時間の厳守、プライバシーの保護など社会的な責任を自覚すること。
- ・ボランティア活動の喜びと「プライド」を持つことによって、子ども達の前で本を読めることのありがたさを実感し、子ども達との「出会い」から、自らも学んで欲しい。
- ・公的な学校の時間を頂いているのであるから、その自覚も忘れないでほしい。
子供たちは好きでお話を聞きに来ているのではなく、好みに関係なくそこにその時間になければならないのだから…。

「ボランティアマナー」…時間厳守

練習を重ねる。日々精進。

学校で知りえた情報を他言しない など。

「質疑応答」

- ・「あとがき」を読むべきか否か…一般的には読まないが、本によりあった方がいい場合もあり、一概に言えない。科学的な本の場合で作者の背景などが記されている場合は読むこともある。
- ・声色を使う事の是非について…読み手と本により千差万別なのでこの場では判断できない。あまり極端なものは不要だと思う。